

卒後教育は、学校教育法に基づく大学院教育とそれぞれの学術・職能団体などが開催する学術集会や研修会をはじめ、同窓会、職場などあらゆる場面で多種多様な形態で行われている。これらの卒後教育は集団あるいは組織単位で行われるのが普通であるが、個人単位で文献や書籍、そして近年ではインターネットを通じて情報を得て学ぶことも卒後教育の一手段である。さらに、研究を通じた知の創造活動は、より能動的な卒後教育といえる。

■大学院における理学療法学教育の現状と展望（小野 玲，他論文）

2007年5月時点で、全国では29校の理学療法系大学院が設置されている。21世紀の大学院に課せられている使命は「高度専門職業人と教育・研究者の育成」であり、高い知識と問題解決能力を有した臨床家の育成が重要な課題である。本稿では大学院における理学療法学教育の現状を神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻の場合を例にとって述べ、理学療法系大学院の問題点と将来展望について言及した。

■日本理学療法士協会の生涯学習システム—新人教育を中心に（青木一治，他論文）

社団法人日本理学療法士協会は、養成校の増加および定員数の増加からくる、新人会員の急激な増加に対し、会員相互の極端な知識、技術の偏りがないよう、卒後からの系統的な生涯教育の一環とすることを目的に、生涯学習システムの構築を考えた。そして、卒後教育の充実を図り、「Profession 構築の基盤」となるための新人教育プログラムを開始することとなった。本プログラムが定着し、新人会員の今後益々の増加に対しては、本プログラムの必修化も視野に入れる必要がある。

■理学療法科学学会の現状と展望（今泉 寛論文）

理学療法科学学会は1986年に結成してから、22年になる。本学会は有限責任中間法人を取得し、今後は公益社団法人の認可を目指し活動している。本学会の学術活動は雑誌および書籍の発行、学術大会、研修会、講習会の開催などを実施している。また、専門認定（運動器、神経、呼吸、循環）の手段としてe-learningを計画しており、より学びたい人のために機会を与えている。今後は国際的な活動および国民に対する活動も検討している。

■セントオーガスティン大学大学院日本校の現状と展望（佐藤友紀論文）

2005年、米国のセントオーガスティン大学と学校法人森島学園の提携の下、セントオーガスティン大学大学院日本校が開校した。日本校は、徒手療法教育を中心とした3年制の技術系大学院であり、on-line 授業で単位を履修でき、症例報告を修士論文としている。このような形式の理学療法領域の大学院は珍しく、臨床現場における理学療法の質の向上に大きく貢献できると考えられる。本稿では、開校から2年が経過した今日の課題、展望について述べる。

■病院における卒後教育の実践と課題（常田康司，他論文）

昨今の理学療法士を取り巻く急速な社会環境の変化によって、教育環境の変革が求められており、中でも卒後教育の充実が急務である。協会主導の卒後教育プログラム（職場外教育）が整備される一方で、各職場を軸とした職場内教育体制の構築も重要である。本稿では、理学療法科開設以来取り組んできた当院の職場内教育の現状と、その実践において重視すべき教育の視点について紹介する。

■関節疾患理学療法研究会の活動（石井慎一郎，他論文）

関節疾患理学療法研究会は、主に関節疾患の理学療法に関する臨床トピックスをテーマに、年数回、講習会やシンポジウムを開催している。本稿では、その活動の内容と今後の取り組みについて紹介する。

■脊髄損傷研究会の活動（小野田英也論文）

脊髄損傷研究会は、1992年、理学療法士有志によって始められた勉強会であり、年1回開催されている。研究会では毎年テーマが決められ、テーマに沿った特別講演、指定演題、シンポジウムなどが行われてきた。理学療法技術の普及、最新研究内容の伝達、脊髄損傷研究会がきっかけとなった、理学療法士協会現職者講習会の調整、マニュアル本の出版など、卒後教育として一定の役割を果たして来た。